

熊本洋学校の教えが花開くとき

When the Teachings of the Kumamoto Western School Bloom

1876(明治9)年1月30日、^{*}35人の若者が、熊本市の花岡山に集った。彼らは讃美歌を歌い、黙とうと聖書朗読を捧げ、「奉教趣意書」に署名し、キリスト教を日本に広めようと盟約を交わした。彼らはのちに「熊本バンド」と呼ばれる。

花岡山で誓約をしたのは、熊本洋学校の生徒たちだった。洋学校教師のジェーンズは来熊3年目ごろから、自宅で有志の生徒を集めて聖書研究会を始めた。しかし、キリスト教が「耶穌教」と呼ばれ忌避される時代、キリスト教徒を公言した若者たちは弾圧を受ける。メンバーの中に、横井小楠の息子・時雄もいた。

花岡山の誓いが交わされた年、熊本洋学校は閉校。生徒たちは、京都の同

志社英学校へ転校していった。熊本洋学校の高いレベルの講義を受けてきた彼らは、同志社英学校で抜きん出た存在で、教師たちは「熊本バンド」と呼んだ。熊本バンドは、札幌バンド、横浜バンドとともに明治のプロテスタント派の源流となる日本三大バンドといわれる。

熊本バンドのメンバーのうち、横井時雄は同志社の第3代総長、海老名弾正(時雄の妹みや子の夫)は第8代総長。ほかにも、言論人の徳富蘇峰など多彩な人材を輩出した。

^{*}熊本バンドの人数及び花岡山で誓約を立てた人数は諸説ある。ここでは熊本県立大学(2012)『ジェーンズが遺したもの』熊日新書所収、黒田孔太郎執筆「ジェーンズ邸について」に拠った。



JR熊本駅のすぐ北側に位置する花岡山に建てられた「熊本バンド 奉教之碑」。花岡山は夜景と桜の名所でもある

リデル、ライト 両女史記念館

Riddell & Wright Memorial Museum

リデル、ライト 両女史記念館

愛と奉仕の生涯を刻む
ハンセン病患者救済と
福祉の拠点

1891(明治24)年、宣教師として英国から派遣されたハンナ・リデルは来日した後、熊本市内の本妙寺の参道でハンセン病患者を目の当たりにし、患者救済を決意した。同じ船で来日したグレイス・ノットと共に英国などで寄付を募り、1895(明治28)年、熊本市中央区黒髪に現在地に「回春病院」を開設した。

リデルはさらに「感染症としてのハンセン病研究所」の創設を構想。北里研究所と連携して、回春病院の一角に「癩菌研究所」の建設が計画された。著名な建築家だった中條精一郎に相談して設計の基本構想がつくられた。建物は平屋で、ハンセン病研究所として1919(大正8)年1月に完成した。

回春病院創立の翌年に来日し、リデルの後継者となった姪のエダ・ハンナ・ライトがその後2階部分を増築。1階を病院の事務室、2階を自身の居住スペースとした。19

41(昭和16)年に回春病院は閉鎖され、ライトも国外追放されるが、建物は戦時中も焼失を免れた。戦後、ライトは再び来日。ハンセン病で菊池恵楓園に隔離入院している患者の子どもたちの世話に力を尽くした。愛と奉仕に生涯を捧げたリデルとライトの両女史は敷地内の納骨堂で、亡くなった回春病院の患者たちと共に眠っている。

建物は「リデル、ライト記念老人ホーム」(後にリデルライトホーム)に改称)の管理棟として利用されてきたが、のちに熊本市に寄贈され、1995(平成7)年に「リデル、ライト両女史記念館」として開館。現在は国の登録有形文化財。

館内には両女史が使った机や鏡台、リデルが最初にハンセン病患者と出会ったときのことを記した日記、大隈重信がリデルに送った手紙など数千点が保管・展示されている。



ハンナ・リデル(右)と姪のエダ・ハンナ・ライト。



大隈重信からリデル宛に送られた書状。



リデルの宝宝箱。懐中時計や指輪のほか、一分銀のプレスレットも保管されている。



グレイス・ノットは夏目漱石と書簡のやり取りをする間柄だった。



リデルからライトに引き継がれた机。

被災後のすがた

被災直後、リデル、ライト両女史記念館に大きな被害は認められなかった。しかし正面玄関は傾き、上部に増築された2階の廊下も傾くなど、徐々に被害の実態が明らかになった。



記念館の内部は天井板がずれ、壁の漆喰がはがれ落ちるなどの被害を受けた。基礎部分のレンガにもクラックが入ったが、倒壊には至らなかった。

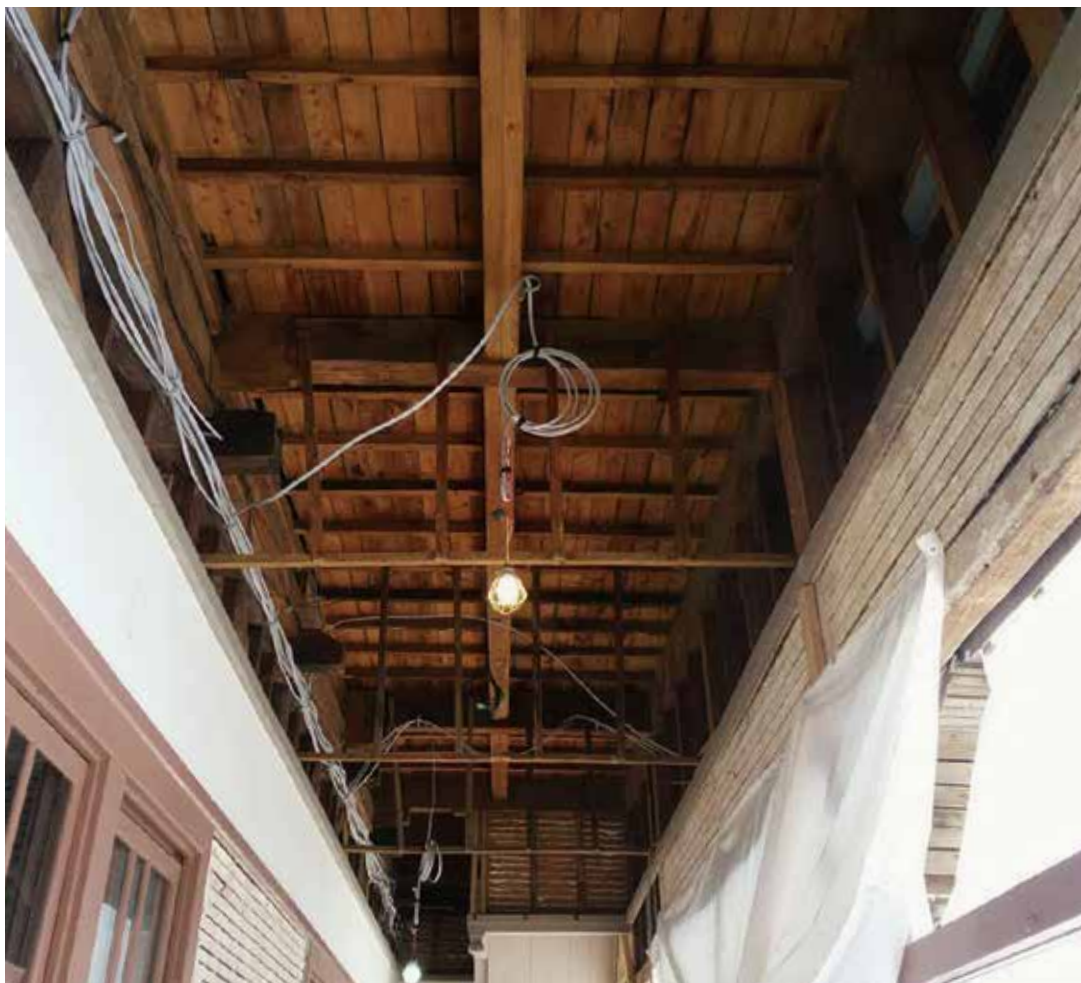
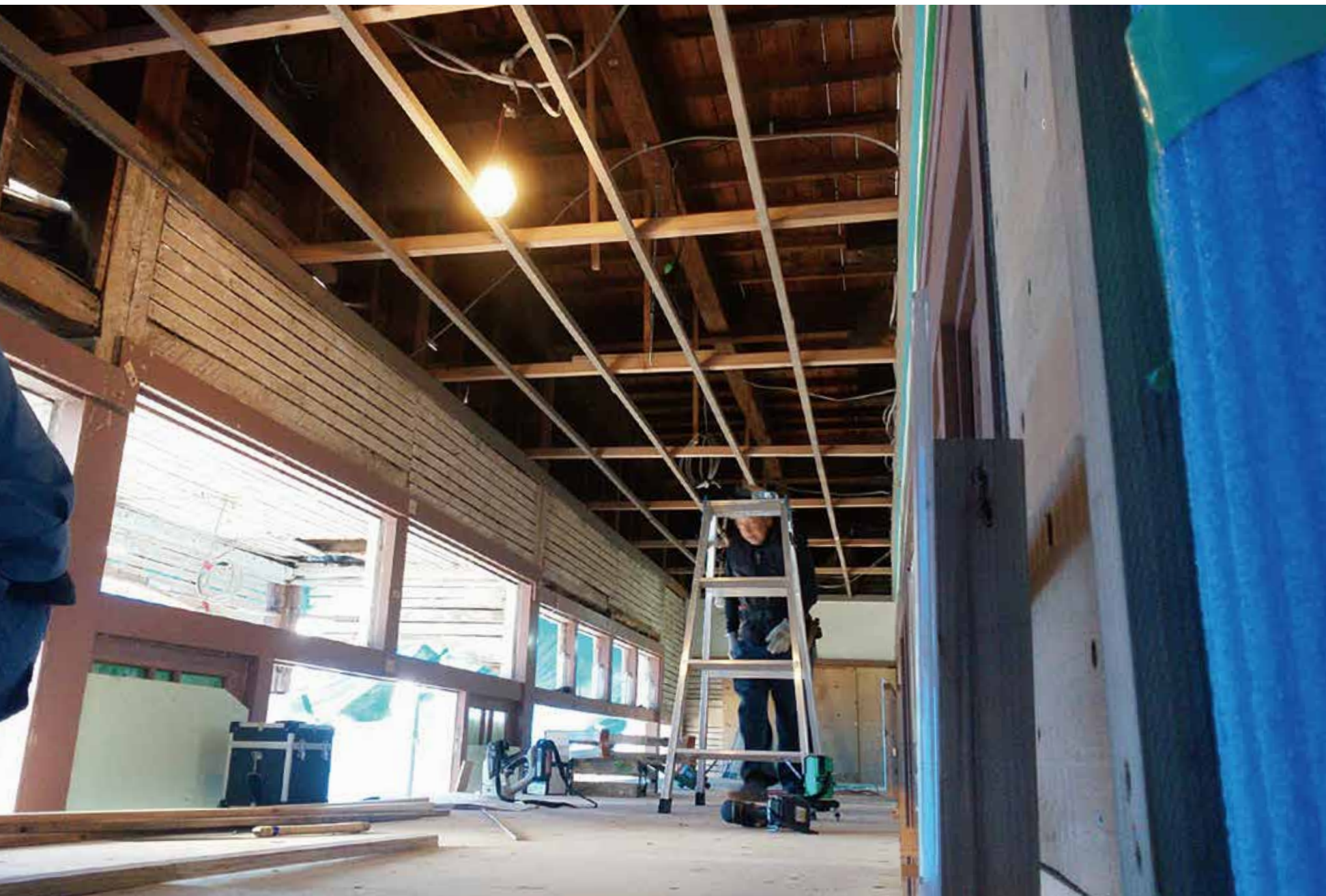


地震の揺れで玄関の柱がずれ、ひびが入ったポーチ部分。玄関内部は前のめりに傾いていた。復旧にあたっては、建物を水平に戻す作業が最大の課題になった。



2階を支えるため、井桁を組み、梁を入れ、仮柱を立てて上部を支えるという工法を繰り返しながら、慎重に内部の作業を進めた。





正面玄関内部の復旧作業。1階正面の壁をパーツごとに一面ずつはずした後に、天井や土間の作業が進められた。



白アリの被害を受けた箇所は、食われた部分を切って新しい木材を当て込んだ。1階の床板の復旧にあたっては、板の位置を記録し、すべての床板を元の位置に正確に戻した。





「できるだけ新しいものを使わずに、あったものを直して元に戻す」という文化財の復旧の基本に沿った作業が各所で行われた。

復旧現場から



リデル、ライト両女史記念館はハンセン病研究所として1919（大正8）年、著名建築家の中條精一郎の設計により竣工。白亜の洋風木造建築で、当初は平屋建て、後に2階建てに増改築された。2008年、国の登録有形文化財に登録された。熊本地震では、傾斜地に面していた正面玄関が傾き、その上部に増築された2階の廊下の被害が大きかった。

白アリ被害で

復旧計画は見直し

傾いた正面玄関を

戻す作業に注力

復旧工事を手掛けたのは熊本市の株式会社新陽建設（現在は閉鎖）。同社の元代表取締役で、一級建築士の熊野勝司さんは現場の責任者を務めた。「記念館に外見上の大きな被害は認められなかったが、建物のひずみにはすぐに気付きました」



当初の工事計画では、前のめりに傾いた正面玄関の復旧と、建物の耐震補強が主だった。しかし、工事を進めるうちに、白アリの被害が見つかった。全容をつかむため、1階の床板を全部はいだところ、土台や床を支える横組みの大引、柱などが白アリに食われていた。しかも地震の揺れで、地面にひびが入り、基礎部分のレンガにクラックがあることも判明。床下を見た熊野さんは「よく倒壊しなかったな」と思うと同時に、「大きな部材を使って、しっかり作ってある」という印象を持ったという。

もう一つ想定外だったのが、記念館前の道路の狭さ。大型の重機は通れない。車も横付けできない。隣接するリデルライトホームへの食料搬入などにも同じ通路が使われている。作業時間の調整が必要だった。

2階を支えながらの 慎重な作業

白アリ被害で作業は見直しを迫られたが、最大の難関は傾いた正面玄関を水平に戻すことに変わりはない。1階正面の壁を取り払って、2階を支える6本の大柱をはずし、土間（テラス部分）を掘削して新たな基礎をつくらなければならない。

まず1階正面の壁は、後で窓がきちんとはめ込めるように、パーツごとに一面ずつ外した。壁の両側に発泡スチロール、ベニヤ、横木を入れ、両方からボルトを刺してサンドイッチ状にして取り除く。壁と同時に大柱も外していく。

問題は、大柱を外した時にどうやって2階を支えるかだった。井桁（いげた）を組み、梁を入れ、仮柱を立てて上部を支えるという工法を繰り返しながら、慎重に内部の作業を進めた。すべて小型機械と人の手による作業だ。「期間中、最も苦労した箇所です」と振り返る。



あったものを 直して元に戻す

文化財ならではの苦労もあった。「文化財の復旧の基本は『できるだけ新しいものを使わずに、あったものを直して元に戻す』ことです。その部材がどこに、どういう風にあったかを記録しなければなりません」と熊野さん。測量図面を片手に、数多くの記録写真を撮影しながらの作業となった。

例えば床板をはぐ場合は、木札に書いた番号を床板ごとに仮釘（かりくぎ）で留める。元に戻す際は番号順に並べていくが、そのまま並べれば最後に合わなくなるという。板と板の間にあったゴミなどが取れて隙間が広がるからだ。そこで、無地の検竿（けいさん）に印を付けながら板の位置を記録し、すべての床板を元の位置に正確に戻す。設計書にはない現場の工夫だ。

「人研ぎ（ひとけんぎ）工法」で模様が描かれた土間にも苦労した。人研ぎとは、人造石の表面を研磨して仕上げる工法である。震災前の状態に戻すため、床面の目地（めじ）の位置をすべて測量して取り掛かった。ところが、昔の職人が手掛けた人造石はかなりの重量があるため、人の手で簡単に持ち上げることができない。クレーンが持ち込めないで、2人で何とか抱えることができる数個を外し、熟練の職人がきれいにカットして元の場所に入れ込んだ。「あったものを直して元に戻す」という作業がここでも行われた。

白アリの被害を受けた箇所も、「食われた部分を切って、新しい木材を当て込む」という文化財修復の基本に沿って行われた。熊野さんは「既存の建物をできるだけ忠実に元に戻す。文化財の修復には、そのための創意工夫が求められます」と振り返る。



一級建築士
熊野 勝司 さん



記念館の横(東側)にある納骨堂には、リデルとライトが回春病院の患者たちと共に静かに眠っている。



令和4年4月に復旧工事が終了、5月下旬から一般公開された。細部まで丁寧に仕上げられ、両女史のような優しい雰囲気が館内に広がっている。

復旧したリデル、ライト両女史記念館



優しい日差しが館内に差し込む。絵画は熊本で大正から昭和にかけて活躍した画家の村上狂児によるリデル女史像。菊池恵楓園にある「菊池黎明教会」の礼拝堂に飾られていた。



エントランスの床には「人研ぎ工法」で模様が描かれた人造石が敷き詰められている。熟練の職人により、当時の重厚感そのままに再現。そこから西側へ進むと出窓がある。リデルはこの出窓に座って外を眺めるのが気に入っていたと言われる。





館内では、当時の家具や直筆の日記など、貴重な品々を見ることができる。2階の窓からは、両女史の納骨堂が見える。



リデル没後、ライト女史により増築された2階の廊下。和洋折衷の趣があり、窓からはかつて回春病院の建物が見渡せた。



東南角の部屋の丸窓はこの建物の特徴の1つ。
西洋を彷彿とさせる白壁に、屋根は日本古来の寄棟造棧瓦葺。西洋と和風が融合した建物。



リデルとライトのトランク。リデルは1890年11月にイギリスを出港、翌年1月に神戸港へ着いた。約2カ月の船旅だった。





リデルライトホームの敷地内にある別棟の「降臨教会礼拝堂」。リデルが愛用していたオルガンは今も健在だ。



ゆかりの人

記念館はリデル、ノット、
ライトの3女史への敬意と
“福祉の精神”のシンボル

リデル、ライト両女史記念館は熊本市からの委託を受けて、「リデル、ノット、ライト顕彰会」が管理している。顕彰会の会長も務める小笠原嘉祐さんに、ハンセン病患者の救済事業や記念館の歴史などについて聞いた。



社会福祉法人 リデルライトホーム
理事長 小笠原 嘉祐 さん

―熊本地震直後の記念館の被災状況はどうでしたか。



小笠原 地震による建物の倒壊はなく、外から見た限り大きな被害は認められませんでした。ところが翌日、館内に入って驚きました。建物全体が少し南側に傾き、ずれが生じていたのです。目についたのは床や壁の亀裂です。基礎の床面は全体にずれ、壁の漆喰（しっくい）がはがれ落ちている。日記や書簡などのゆかりの品々は別棟の金庫に保管していたので無事でしたが、展示物ではライト女史が使っていた大きな鏡台が倒れて鏡は割れ、枠は折れていました。

大隈重信や渋沢栄一らを動かしたリデル女史の情熱

―ハンセン病患者救済事業の始まりと経緯について教えてください。

小笠原 1891（明治24）年4月3日、ハンセン病患者との出会いをきっかけに、ハンナ・リデルはグレイス・ノットと共に救済事業を立ち上げました。2人は英国国教会から派遣された宣教師で、救済事業は教会の承認を得て、伝道活動の一環として始まりました。当時の日本には福祉的な概念が乏しく、施設は全くなかったので慈善（チャリティー）活動としてスタートしました。

彼女たちは1895（明治28）年に回春病院を開設します。ノットは明治末期に英国に戻りますが、時々寄付を続け、遺言状には資産の一部を病院に譲渡する旨を記しています。ノットも生涯病院を支え続けたのです。

リデルの情熱は国を動かしました。英国からの送金が途絶えがちになると、大隈重信に

節目の巡り合わせで存続決断

国の登録有形文化財に

―「リデル、ライト両女史記念館」については、どうお考えでしょうか。

病院への援助を求めます。ハンセン病救済事業は国家の責務だと訴えたのです。大きな関心を持っていた渋沢栄一らもリデルを支援し、ハンセン病は国家の問題として認められるようになりました。

1907（明治40）年、国はハンセン病患者救済に重点を置いた「癩（らい）予防ニ関スル件」を制定し、全国に5つの公的療養所を作りました。記念館には大隈重信からリデル宛に「政府がこの問題に乗り出す」ことを伝える書状が残されています。しかし、時代の流れとともに「癩予防ニ関スル件」は改定を繰り返し、「らい予防法」となって患者の隔離へとつながっていきました。

戦時中“つぶされた”回春病院 ライト女史も国外退去に

―回春病院が閉鎖された後、リデルの後継者のエダ・ハンナ・ライト女史は国外に退去します。当時の状況についてはどうお考えですか。

小笠原 資料には「回春病院は経営困難のために閉鎖された」と記されていますが、別の理由があったのではないのでしょうか。当時の入院患者たちは自由に外出していたため、明らかに「らい予防法」に違反していました。また、病院が外国人の経営であったことも問題視されたと思います。つまり回春病院は国によって「つぶされた」のです。

患者たちは隔離のために菊池恵楓園に送られました。閉鎖された1941（昭和16）年2月3日、ライトは「政府は私たちの患者を奪った」とメモしています。偶然にもその日はリデルの命日でした。ライトもその後、オーストラリアへの国外退去に追い込まれました。

